

## 大学教育と進路

—— 大学教育の満足度に関するアンケート調査より ——

遠藤秀紀\*・鈴木健司\*・西村一彦\*

### 要 旨

本研究では、希望通りの進路を選択する学生の傾向についてアンケート調査を行い、これに基づいて大学教育の成果を検討した。とくに、学生の大学教育に対する満足度を説明する要素として、大学教育における教育供給側の要素と共に、教育需要側の要素を考慮して分析を行った。また、講義に対する WTP を、アルバイト代の補償額により測定した。

キーワード：大学教育，進路，満足度，アンケート

## 1 はじめに

近年、学校教育に対して学生の学力低下が指摘されるなど多くの批判的な意見が寄せられるようになった（西村・岡部・戸瀬 1999）。ところが、学生の学力低下については様々な見解があり、また学校教育と学力低下の関係も明らかにされていない。そのため、教育の成果を経済学的に分析する研究が行われる必要性がある。

しかしながら、教育の成果を実証的に分析することは非常に難しい。なぜなら教育の成果をどのように測るのかという問題があるからである。例えば、教育の成果を統一化された学力試験の成績で測る場合でも、それが教育の成果として捉えても良いのかということについては議論の余地がある。日本では経済学の観点から教育成果に対する教育の質の影響を分析した研究はあまりみられない。また、実証分析の蓄積があるアメリカにおいても、学力試験成績を用いる手法や、Card and Krueger（1992）のように就業後の賃金を代理変数とする手法などがあり、見解は一致しない<sup>(1)</sup>。

---

\* 日本福祉大学経済学部経済学科

本稿は、2004年度日本福祉大学課題研究（奨励研究）による助成を受けて行った研究成果の一部である。

(1) 浦坂・西村・平田・八木（2002）では、就業後の所得に加え、昇進・転職も成果として考慮している。

一方、教育の成果を高めるときに重要な要素の一つとして、教育の質があげられることが多い。教育の質の代理変数として主に用いられるのは、学生1人あたりの教員数や教員の経験・給与などのいわば供給側の変数であるが、Hanushek (2002)によれば、学生1人当たり教員数は、教育成果に対して有意でないことが指摘されている。また、Rothschild and White (1995)などで指摘されるように、教育においては供給側だけでなく、需要側も教育の生産に影響を与えると考えられる。そのほか、小塩 (2002) や小塩・妹尾 (2005) のサーベイでも、同様のことが指摘されている。そのため、供給側の要素だけを用いた分析では分析結果に偏りが生じる可能性がある。

さらに、既存研究では、データの制約において最終卒業学校卒業後、つまり将来時点の成果が念頭におかれていると考えられるため、学生の講義に対する満足度や就業（内定）の可否のような最終卒業学校在学中（現在時点）の成果を明確に分析することが困難である。

そこで、本研究では筆者達が比較的調査がしやすい大学教育を対象を絞り、学校教育の成果について供給側と需要側の要素特性を考慮した場合の教育成果を検討することを意図している。本研究では、前述した既存研究と異なり、教育の成果を「学生の満足度」として捉えていることに特色がある。教育の成果としての「学生の満足度」は、大学講義に対するものと、将来の進路決定に対するものの2つに分けることができる。まず前者の大学講義に対するものとして、「講義の機会費用」すなわち講義に対する学生各自のWillingness-to-payの指標を用いた。これは、学生が講義に対してどれほどの主観的な価値をおいているのかを、仮想的ではあるが金額表示したものとして捉えることができる。次に後者の将来の進路決定に対するものとして、「希望どおりの進路になったのか」という指標を用いることにした。さらに「希望どおりの進路になったのか」という指標に影響を与える要素として、大学が提供する供給要素と需要要素を加えている。

本研究の「学生の満足度」を教育の成果指標として採用することには、議論の余地がある。しかしながら、この指標を採用することで大学での講義や供給している学習環境の要素が、教育の成果としての「学生の満足度」に与えている影響を直感的に把握できるアプローチの一途になると思われる。また、本研究では、卒業時点での「学生の満足度」を分析することにより、既存研究では十分に分析が行えない大学在籍期間の教育の成果について議論をすることができる。

本研究の構成は以下のとおりである。本研究において採取したデータの詳細について述べ、次に講義に対するWillingness-to-payを検討する。そして希望どおりの進路と大学教育の成果の関連についての知見を得る。

## 2 データの詳細

### 2.1 調査対象・方法

本稿で用いるデータは、私立大学経済学部卒業生を対象に行った「大学教育の満足度に関するアンケート」（2004年3月実施）に基づくものである。このアンケートは、大学の教育で学生

がどの程度満足したのかを調査することが目的であり、就職等の進路や講義内容等に対する評価、学生時代のアルバイト・サークル参加の有無などを聞いている。また「講義時間にアルバイトを頼まれた場合、どの程度の金額であればアルバイトを引き受けるか」という仮想的質問項目も調査した。

調査対象の私立大学は、社会福祉系の大学として戦後に設立された愛知県の人文社会科学系大学であり、調査対象時点では4学部が設置されている。その中から、今回の調査に協力を得た経済学部を対象とした。

調査は2004年3月の学位記授与式後、対象者（卒業生）204人にアンケート用紙を直接配布し、その場で記入・回収を行った。回収数は158枚で、回収率は77.5%である。アンケート調査項目は付録Aに掲載した。

## 2.2 記述統計

質問項目によって変動はあるものの、135～158名から回答が得られている。主要な変数の記述統計を表に示した<sup>(2)</sup>。回答者は133名が男性、25名が女性である。

全体の42.6%が推薦入学試験を経て入学しており、残りは一般入学試験である。推薦入学試験は、特定の課題に対するレポートや高等学校の調査書などによる書類審査と面接試験による考査であり、一般入学試験は学力試験による考査を行っている。

下宿（自宅外）からの通学者は43.6%である。今回、全国規模での統計調査は確認できなかったが、平成17年国勢調査（抽出速報）によれば、15～24歳の単独世帯と寮・寄宿舎の学生・生徒は14.6%である。年齢区分が異なるために単純比較はできないものの、調査を行った学部では、下宿通学者の割合が平均より高いことが示唆される。対象学部所属者の出身は全国に及ぶことや、人口が集中していない地域に校舎が存在するなど、立地条件などの影響から下宿の割合が高いと考えられる。平均通学時間は51分であるが、図1の分布を確認すると、30分未満におよそ半数が集中し、以降50～60分、約90分、約120分の付近に集中している。

サークルの所属経験がある者は58.6%である。図2によると、サークル所属者の大半は1時間以内の通学時間であることが読み取れる。

アルバイトは86.7%が経験しており、平均時給は985.8円である。

進路選択が希望通りか、という項目は、二者択一の主観的尺度として集計した。63.1%が「希望通り」と回答している。ただし、「希望通り」と回答した回答者がどのような基準で意思決定しているのか、という点は明確でない。この点については後述する。

進路は、第1次産業1.3%、第2次産業19.6%、第3次産業（公務を除く）56.2%であり、第3次産業の割合が高い。それ以外は、公務が3.2%、進学が5.9%だが、アルバイト・未定も13.7%存在する。文部科学省『学校基本調査（平成17年度版）』では、第1次産業就業者は0.1%、

(2) 表 以外の記述統計は付録Bを参照。

第2次産業 13.5%，第3次産業（公務を除く）62.9%，公務 4.2%，大学院等への進学 4.5%，専修学校・外国の学校等入学者 2.8%，一時的な仕事に就いたか，死亡不詳の者 10.1%となる．全国と比較すると，回答者は第2次産業への就業比率が高く，第3次産業就業比率が低い．また，「アルバイト・未定」と「一時的な仕事に就いたか，死亡・不詳の者」とが一致するとすれば，アルバイト・未定者比率もやや高い．

取得単位に関する状況も調査した（詳細な結果は付録 B に掲載）．まず，取得単位数から確認してみよう．要卒業単位数は 124 単位以上のため，取得単位数の下限は 124 単位である．なお，

表 主要な変数の記述統計

	サンプル	平均値	標準偏差	最小値	最大値
<b>基本情報</b>					
性別 (0:男, 1:女)	158	0.158	0.365		
入試区分 (0:推薦, 1:一般)	155	0.574	0.494		
居住場所 (0:自宅, 1:下宿)	156	0.436	0.496		
通学時間 (分)	158	51 40	43.9	1	180
サークルの有無 (0:なし, 1:あり)	157	0.586	0.493		
バイトの有無 (0:なし, 1:あり)	158	0.867	0.339		
バイト (時給換算)	109	985.8	284.9	680	2,500
<b>進路選択</b>					
希望通りか (0:いいえ, 1:はい)	157	0.631	0.483		
第1次産業	153	0.013	0.114		
第2次産業	153	0.196	0.398		
第3次産業 (公務を除く)	153	0.562	0.498		
公務	153	0.032	0.178		
進学	153	0.059	0.235		
アルバイト・未定	153	0.137	0.344		
<b>単位</b>					
取得単位数	157	133.7	10.31	127.5	166.5
取得単位 A 数	154	58.882	33.185	8.9	126
単位 A 比率	154	0.439	0.243	0.065	0.988
<b>大学設備の評価</b>					
講義棟 (受講環境)	158	0.823	0.382		
図書館の自発的利用	158	0.576	0.494		
コンピューター教室の自発的利用	158	0.835	0.371		
大学のホームページの利便性	157	0.637	0.481		
事務室の対応	157	0.567	0.496		
<b>講義に対する Willingness-to-Pay(WTP)</b>					
必修科目	157	0.414	0.493		
必修科目 WTP (円)	45	1,565.60	1,538.70	700	10,000
専門	156	0.442	0.497		
専門科目 WTP (円)	53	1,717.00	2,117.7	800	10,000
専門科目以外	157	0.484	0.5		
専門科目以外 WTP (円)	60	2,135.20	2,849.2	800	15,000
出席科目	157	0.35	0.477		
出席科目 WTP (円)	38	1,839.50	2,146.4	800	10,000

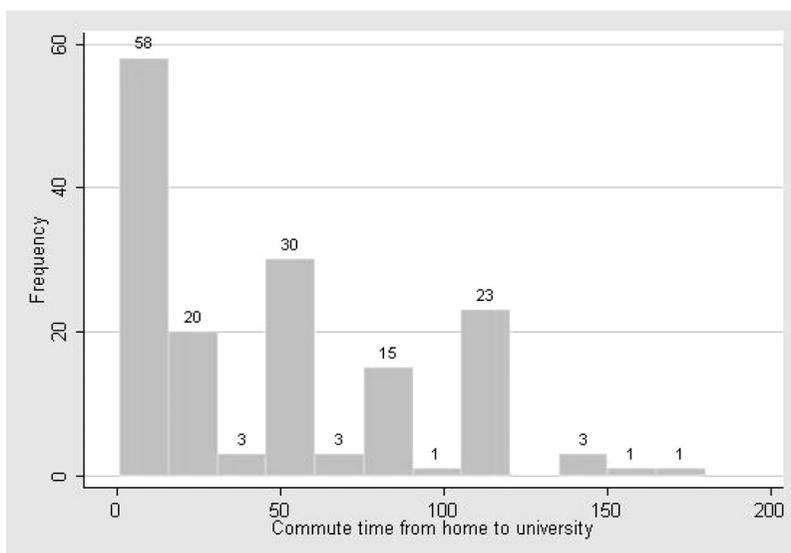


図1 通学時間のヒストグラム

1科目あたりの単位数は講義期間の長さ依存しており、2単位もしくは4単位である。階級ごとに確認すると、124～131単位を取得した回答者は60.5%で、過半数を占める。単位数が増加するにしたがって、取得者はおおむね減少する傾向にある。階級値をもとに推計した平均単位数は、133.7単位だった。

次に、取得単位のうち、Aの取得数を確認しておこう。講義理解に対する最終評価は、A・B・C・Dの区分で行われる。もっとも講義内容の理解が高いとされるのはAで、以下B、Cの順となる。A・B・Cいずれの評価でも、単位取得が認められる。Dは不可であり、当該科目の単位取得は認められない。確認すると、11～15科目でAを取得した回答者が最も多く、31.8%存在する。

大学設備の評価については、講義棟での受講環境に対する肯定的回答が82.3%と高い。また、コンピューター教室の自発的利用は83.5%と高く、学生が情報設備にアクセスしやすい環境にあったことがわかる。

上記のほか、講義内容に対する評価として、科目属性（必修科目・専門科目・専門以外の科目・出席を採る科目）ごとに、それぞれ知的好奇心・教員の熱心さ・就職に役立つか、という項目について質問した。どの項目も多少のばらつきはあるものの、回答者の60～80%台が肯定的な回答をした。講義選択時についても、科目属性ごとに、講義への興味の有無・学習意欲の有無・出席意欲の有無をたずねた。こちらも、講義内容に対する評価と同様、回答者の60～80%が肯定的な回答だった。

講義に対するWillingness-to-Payについては、次節で論じることにする。

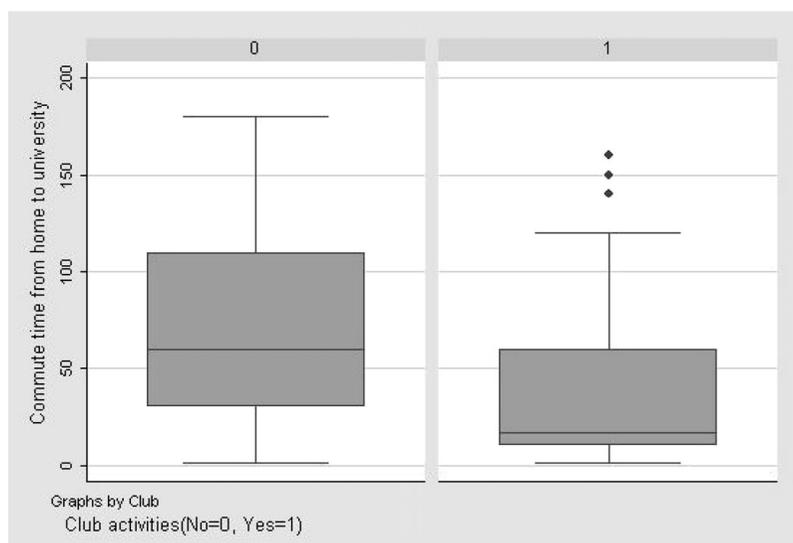


図2 サークル活動別通学時間のボックス図

### 2.3 講義に対する Willingness-to-Pay

このアンケート調査では「講義の時間にアルバイトを行うかどうか？行うとすれば、時給何円以上で行うか？」という仮想的質問も行った。これを、講義に対する各自の Willingness-to-Pay (WTP, 支払い意思) と考えてみよう。

表 によると、アルバイトを行ってもよいとする割合は専門科目以外が 48.4%と最も高く、以下、専門科目 (44.2%)、必修科目 (41.4%)、出席科目 (35.0%) となった。出席科目は講義への出席回数が直接成績評価に反映する可能性が高いことや、必修科目は単位取得が卒業要件となることを勘案すると、この割合が低いほど欠席リスクの評価が高いと推測される。

しかし、平均 WTP は必修科目が 1,565.6 円ともっとも低く、次いで専門科目 (1,717 円)、出席科目 (1,839.5 円)、専門科目以外 (2,135.2 円) となった。もし、講義時間にアルバイトを行ってもよいとする割合が講義欠席リスクの尺度とすれば、リスクの高い科目種類ほど WTP は高くなると考えられる。しかし、表 でそのような傾向は確認できなかった。

### 2.4 希望通りの進路と大学教育の成果

ここでは、「進路は希望通りか」という質問に対する回答を、大学教育の成果 (アウトカム) の指標と捉えることにする。

もちろん、大学生活の成果は卒業時点のみで計れるものではなく、就業後の所得や昇進など、将来時点のさまざまな要素にも影響すると考えられる<sup>(3)</sup>。「希望通りの進路かどうか」という主

(3) 浦坂他 (2002) では、就業後の所得や昇進・転職を成果と捉えて分析を行っている。

表 進路希望変数と関連する変数の分割表														
(A) 進路 (第3次産業)				(B) 進路 (アルバイト・未定)				(C) 部活・サークル所属						
		非該当	該当	合計			非該当	該当	合計			なし	あり	合計
希望進路				希望進路				希望進路						
いいえ	43	12	55	いいえ	38	17	55	いいえ	19	39	58			
はい	50	47	97	はい	94	3	97	はい	46	52	98			
合計	93	59	152	合計	132	20	152	合計	65	91	156			
$\chi^2(1) = 10.485, P = 0.001$				$\chi^2(1) = 23.767, P = 0.000$				$\chi^2(1) = 3.014, P = 0.083$						
(D) アルバイト意思 (必修科目)				(E) アルバイト意思 (専門科目)										
		なし	あり	合計			なし	あり	合計					
希望進路				希望進路										
いいえ	39	18	57	いいえ	37	20	57							
はい	52	47	99	はい	49	49	98							
合計	91	65	156	合計	86	69	155							
$\chi^2(1) = 3.761, P = 0.052$				$\chi^2(1) = 3.245, P = 0.072$										
(F) アルバイト意思(専門科目以外)				(G) 事務室の対応										
		なし	あり	合計			なし	あり	合計					
希望進路				希望進路										
いいえ	35	22	57	いいえ	30	27	57							
はい	45	54	99	はい	37	62	98							
合計	80	76	156	合計	67	89	156							
$\chi^2(1) = 3.683, P = 0.055$				$\chi^2(1) = 3.437, P = 0.064$										

観的な指標が、就業後の昇進や生涯所得に影響するかどうかは明確でないが、希望通りの進路の場合、転職選択の確率は低下し、最初に就業した企業での長期雇用を選択するかもしれない。生え抜きの就業者の昇進年齢は非生え抜き就業者より若いことが先行研究で示されているが、このような仮説が妥当であれば、卒業生が希望通りの進路を選択できることは、大学教育にとって大きな成果と考えられる<sup>(4)</sup>。

そこで、本節では「進路は希望通りか」という変数（希望進路）を大学教育の成果の一つとし、前節で示した諸変数が有意に関連するか、検討することにしたい。

希望進路と前節の変数のほとんどは二値応答のため、分割表で表現できる。ここでは、変数間の関連（独立性の有無）について、変数間が独立であることを帰無仮説とする<sup>2</sup>検定により確認した。検定を行った組み合わせのうち、希望進路との関連が独立との仮説が棄却された組み合わせは、表に示した7変数（就職先が第3次産業かアルバイト・未定、部活・サークル所属、

(4) 例えば、小野(1997)では、生え抜き就業者は非生え抜き就業者より管理職到達年数が短いことを示している。ただし、同研究では、上位管理職への昇進ほど生え抜きの影響が弱いことも示唆しており、注意が必要である。

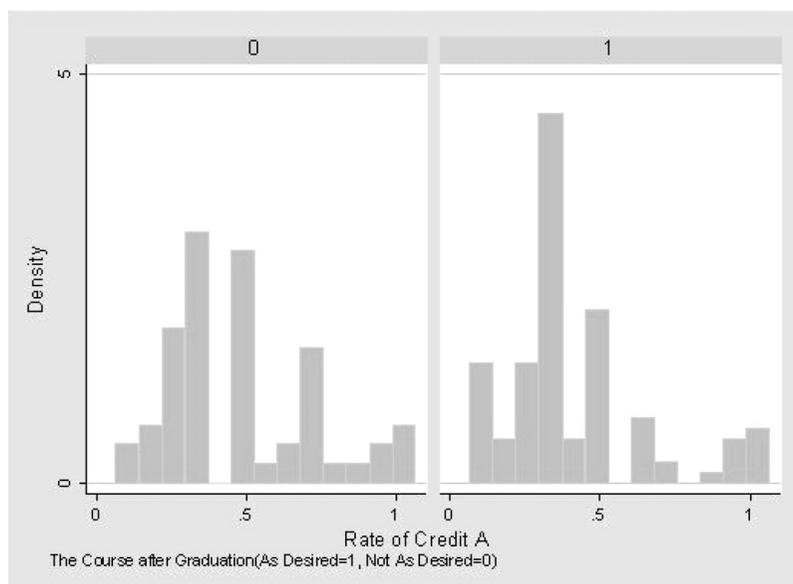


図 3

事務室の対応，アルバイト意思（必修科目・専門科目・専門科目以外）である．表 1 にない変数の組み合わせは，すべて有意水準 10%でも棄却できなかった．

表 1 の分割表では，表側に希望進路（はい・いいえ），表頭に（A）～（G）の各変数を記した．まず，（A）・（B）就職先との関連では，第 3 次産業およびアルバイト・就職先未定との関連が 5%水準で有意である．第 3 次産業就業予定の者に希望進路の通りと答える回答者が多く，就業先が決まらない者に希望進路でないとは回答する者が多い．これらの変数と希望進路とがどのような関係を持つのか，ということは十分な検討が必要だが，就職先が決まらない状態と近い概念である失業は，主観的な幸福度を引き下げる可能性のあることが先行研究で示されている<sup>(5)</sup>．

次に，（C）部活・サークル所属との関連は有意であると示された（10%水準）．ただし，部活サークル所属者のほうが希望進路通りと回答する割合は低い．「部活サークル所属者は，OB のネットワークを通じた有利な条件下で就職先を決定しているのではないか」という仮説の検証はいくつか行われているが，先行研究から得られる知見は一貫しておらず，対象となる大学によっても異なる可能性が指摘されている<sup>(6)</sup>．

（D）～（F）に示した，講義時のアルバイト意思との関連は，必修・専門・専門以外の各科目

(5) 大竹（2004）では，海外の先行研究のサーベイと日本のデータを用いた実証研究を行い，失業が幸福度を引き下げることを示している

(6) Hosotani and Urasaka（1997）では，企業を対象に調査を行い，各企業の出身大学 OB 比率が高いほど就職率を上昇させることを示している．一方，梅崎（2004）では，スポーツ系サークル所属者を対象とした場合，OB の存在は就職率を高めないと示されている．

について、10%水準で有意という結果を得た。ただし、アルバイト意思のある者に希望進路通りと回答する者が多い。この点については、前節の議論も踏まえながら慎重に検討する必要がある、ここでは結果の開示にとどめたい。

(G) 事務室の対応との関連は10%水準で有意となった。事務室の対応を十分と感じている者に希望進路通りと回答する者が多かった。

図3に、取得単位A比率のヒストグラムを示した。ヒストグラムは、X軸を取得単位A比率、Y軸を分布の密度とし、進路が希望通りか否かによって区別している。分布の形状はやや異なるものの、大きな差異は見られない。進路について希望通りでないと回答した者の取得単位A比率は平均47.9%、標準偏差0.033、希望通りと回答した者は平均41.1%、標準偏差0.024となった。等分散性を仮定したt検定を行ったところ、有意水準10%ではあるものの、両者の平均が等しいという仮説は棄却された。

### 3 おわりに

本研究では、(希望通りの進路となったのかといった)学生の大学教育に対する満足度のプロキシを説明する要素として、大学教育における(講義や設備などの)教育供給側の要素と共に、(アルバイトや部活・サークルといった)教育需要側の要素を考慮して分析を行った。また、講義に対するWTPを、アルバイト代の補償額により測定した。

結果として、希望通りの進路は、第3次産業への進路、必修・専門・専門以外科目の時間にアルバイトをする、事務室の対応が十分である、に対して正の相関があり、アルバイト・未定の進路に(当然)負の相関があることが明らかとなった。とくに、これらの有意な要素は主に教育需要側の要素であるという興味深い結果となった。また、講義のWTPは、必修科目、出席科目、専門以外科目の順に大きくなっており、大学に対する多様なニーズを反映する結果となった。

#### 参考文献

- Card, D. and A. B. Krueger (1992) "Does School Quality Matter? Returns on Education and the Characteristics of Public Schools in the United States," *Journal of Political Economy*, Vol. 100, pp. 117-122.
- Hanushek, E. A. (2002) "Publicly Provided Education," in A. J. Auerbach and M. Feldstein eds. *Handbook of Public Economics*, UK: Elsevier Science, pp. 2045-2141.
- Hosotani, M. and J. Urasaka (1997) "Alumni Network Effect on the Labor market for Graduates: A Case Study of Relationship between R-University and Firm," *Osaka City University Economic Review*, Vol. 32.
- Rothschild, M. and L. J. White (1995) "The Analytics of the Pricing of Higher Education and Other Services in Which the Customers are Inputs," *Journal of Political Economy*, Vol. 103, pp. 573-586.
- 梅崎修 (2004) 成績・クラブ活動と就職——新規大卒市場におけるOBネットワークの利用, 松繁寿和 (編) 大学教育効果の実証分析, 日本評論社, 29-48.
- 浦坂純子・西村和雄・平田純一・八木匡 (2002) 「数学学習と大学教育・所得・昇進」, 『日本経済研究』,

46 (2), 22-43.

大竹文雄 (2004) 失業と幸福度, 『日本労働研究雑誌』, 528, 59-68.

小塩隆士 (2002) 教育の経済分析, 日本評論社.

小塩隆士・妹尾渉 (2005) 日本の教育経済学：実証分析の展望と課題, 経済分析, 175, 105-139.

小野旭 (1997) 生え抜き登用の後退と内部労働市場の変質, 中馬宏之・駿河輝和 (編) 雇用慣行の変化と女性労働, 東京大学出版会, 83-113.

西村和雄・岡部恒治・戸瀬信之 (1999) 『分数ができない大学生』, 東洋経済新報社.

付録 A アンケート調査項目

学生時代の様子についてお尋ねします。

1. 性別 (男 ・ 女)
2. 学科 (経済 ・ 経営開発 (昼) ・ 経営開発 (夜))
3. 入試区分 (推薦 ・ それ以外)
4. 通学はどちらからですか? (自宅 ・ 下宿)
5. 通学時間は何分ですか? (居住場所 大学) 分
6. 進路は希望どおりですか? (はい ・ いいえ)
7. 進路はどれに当てはまりますか?

金融・保険 メーカー 農林魚業 公務員 建設 住宅 不動産 運輸  
小売店 (例:スーパー, 百貨店, ショップ) 飲食店 福祉関連 (施設, 事業所, 法人)  
進学 アルバイト 未定 その他 ( )  
該当箇所が不明の場合, 差し支えなければ「その他」に企業名を記入してください

8. 取得単位数  
(124~131 ・ 132~141 ・ 142~151 ・ 152~161 ・ 162以上)
9. 成績のうち「A」評価の取得数  
(0~5 ・ 6~10 ・ 11~15 ・ 16~20 ・ 21~30 ・ 31以上)
10. 部活動・サークル等活動への参加 (有 ・ 無) 学内, 学外は問わない
11. 大学時代, 定期アルバイトの経験の有無 (有 ・ 無)
12. ((10) で「あり」と答えた人のみ) 最も長期間勤めたアルバイトの最高額はいくらですか?  
(日給 ・ 時給) 円)
13. 講義内容について, 大学時代を振り返って教えてください<sup>(7)</sup>.
  - (a) 知的好奇心がわいたか? (はい ・ いいえ)
  - (b) 教員が教育熱心だったか? (はい ・ いいえ)
  - (c) 就職活動に役立ったか? (はい ・ いいえ)

(7) この質問と次の質問は, 科目種類 (必修科目, 必修以外の専門科目・専門外科目・出席科目) 毎に行った。

14. 講義選択時のことを振り返って教えてください。

- (a) 講義に興味があったか？ (はい ・ いいえ)
- (b) 勉強の意欲が高かったか？ (はい ・ いいえ)
- (c) 出席の意欲が高かったか？ (はい ・ いいえ)

15. 大学について

- (a) 講義棟では受講しやすかったですか？ (はい ・ いいえ)
- (b) 図書館を自発的に利用しましたか？ (はい ・ いいえ)
- (c) PC 教室を自発的に利用しましたか？ (はい ・ いいえ)
- (d) 大学のホームページは使いやすかったですか？ (はい ・ いいえ)
- (e) 事務窓口は問い合わせ・相談などに行きやすいと思えましたか？ (はい ・ いいえ)

16. ある日、講義時間帯（90 分間）にアルバイトを頼まれたとします。アルバイトをする場合、講義には出席することができません。その日の講義は通常講義であり、試験・小テストなどは行われなことがわかっています。90 分間の手当が何円以上ならアルバイトをしますか？

なお、アルバイトは単発（その日 1 回のみ）とします。

- (a) 必修科目 (する ・ しない)

アルバイトをする場合、何円以上ですか (                      円以上)

- (b) 必修以外の科目

- i. 専門科目 (する ・ しない)

アルバイトをする場合、何円以上ですか (                      円以上)

- ii. 専門以外の科目 (する ・ しない)

アルバイトをする場合、何円以上ですか (                      円以上)

- (c) 毎回、出席を採る科目 (する ・ しない)

アルバイトをする場合、何円以上ですか (                      円以上)

付録 B 本文では扱わなかった変数の記述統計

変数の元になる質問項目は、付録 A を参照されたい。

表 記述統計（進路選択・取得単位）

	サンプル	平均値	標準偏差
<b>進路選択</b>			
金融, 保険	153	0.098	0.297
メーカー	153	0.124	0.33
農林漁業	153	0.013	0.114
公務員	153	0.033	0.178
建設	153	0.026	0.16
住宅	153	0.046	0.209
不動産	153	0.02	0.139
運輸	153	0.02	0.139
小売店	153	0.176	0.381
飲食店	153	0	0
福祉	153	0.072	0.258
進学	153	0.059	0.235
その他サービス	153	0.176	0.381
アルバイト	153	0.033	0.178
未定	153	0.105	0.306
<b>取得単位数</b>			
124～131 単位	157	0.605	0.489
132～141 単位	157	0.261	0.439
142～151 単位	157	0.057	0.232
152～161 単位	157	0.019	0.137
162単位以上	157	0.057	0.232
<b>単位 A 取得数</b>			
0～5 科目	154	0.084	0.278
6～10 科目	154	0.156	0.363
11～15 科目	154	0.318	0.466
16～20 科目	154	0.208	0.406
21～30 科目	154	0.104	0.305
31 科目以上	154	0.13	0.336

表 記述統計（講義内容評価・選択動機）

	サンプル	平均値	標準偏差
講義内容評価			
知的好奇心			
必修科目	152	0.697	0.459
専門科目	138	0.819	0.385
専門科目以外	135	0.711	0.453
出席科目	139	0.633	0.482
教育熱心			
必修科目	153	0.804	0.397
専門科目	134	0.791	0.407
専門科目以外	135	0.77	0.421
出席科目	138	0.79	0.407
就職に役立つ			
必修科目	152	0.645	0.479
専門科目	137	0.701	0.458
専門科目以外	136	0.618	0.486
出席科目	137	0.672	0.47
講義選択動機			
講義に興味			
必修科目	156	0.75	0.433
専門科目	142	0.803	0.398
専門科目以外	139	0.77	0.421
出席科目	141	0.745	0.436
学習意欲			
必修科目	156	0.673	0.469
専門科目	142	0.732	0.443
専門科目以外	139	0.712	0.453
出席科目	142	0.732	0.443
出席意欲			
必修科目	157	0.764	0.424
専門科目	141	0.787	0.409
専門科目以外	140	0.707	0.455
出席科目	142	0.768	0.422